

SUPER BEAVER

ドン底から這い上がったバンドはコロナ禍を物ともせず突き進む！

SUPER BEAVERにとって結成15周年を迎えた昨年は、メジャーレコード会社との再契約など華々しい大復活の年になるはずだった。しかしコロナ禍の影響で数々の企画が頓挫……そんな自分たちの姿を渋谷龍太 (Vo) は「転んでもタダでは起きないバンド」だと笑う。しぶとく、ガムシャラに叩き上げてきた彼らの2021年は果たしてどっちだ？

コロナ禍で痛感したライブへの飢え

——バンドは昨年4月に結成15周年を迎えました。

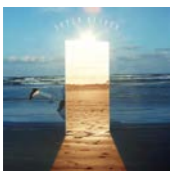
「そのタイミングでメジャー再契約を発表して、本来はそこから1年かけて15周年イヤーをやるはずだったんです。だけどコロナの影響で頓挫したことも多くて」。

——「これから行くぞ！」というタイミングで数々の15周年企画にストップがかかって、気持ち的に落ち込んだんじゃないですか？

「自分たちの歴史上、物事がトントン拍子に進んでいったことは一度もなく(笑)。それでも今回は大きなジャンプアップになるだろうという期待感があったので、正直めちゃくちゃ落ち込みました。そもそもメジャー再契約に関しては、昨年4月8日に代々木公園でフリーライブを開催して、そこで華々しく発表しようと思ってたんです。たくさんの人を会場に集めた上で、来られない方には配信という形を使って直接伝えるつもりだったんです。それがコロナの影響で中止になってしまって……マジでメジャー再契約のタイミングを間違えたと思いましたよ。だって再スタートを切る段階で、いきなり靴のヒモが切れたようなものですから(笑)」。——最初の大イベントでつまずいてしまったわけですね。

「そのときリリースの予定も決まっていたし、大会場でのライブの準備も進めて。だから絶望というか……それに加えて、何かができなくなってしまったのが自分たちだけじゃないという状況も辛かったですね。みんなが厳しい状況に陥ってるわけだから、泣き言も言えないし」。

New Single 『愛しい人』 & 『名前を呼ぶよ』 out now!!



『愛しい人』

『名前を呼ぶよ』
初回生産限定盤『名前を呼ぶよ』
通常盤

——今年に入って状況は変わりました？

「ライブは“動けるんならやろう”という形になってきました。去年は配信ライブはやりましたけど、有観客のライブは10本しかできなくて。それまで僕らは年間100本近くやっていたのに、去年やれたのは10本だけで、そのうち5本はコロナ以前のものですから」。

——例年の1割しかできなかつたんですね……。——「あと、ライブができないことで自分の精神状態がここまで乱れるとは思っていませんでした。自分が音楽をやっていく上で一番大きなモチベーションがライブだったことはそれまでも自覚してましたけど、いざそれを取り上げられてしまうと自分が何のために存在しているのかわからなくなってしまって……。もしこの先こういう形でしか音楽が続けられないのなら、音楽をやる意味なんてないんじゃないかとまで思い詰めたんです。かなりしんどい状態でしたね」。

——渋谷さんにとって、そこまでライブは重要なものだったんですね。

「これまでライブってオンステージにいる僕らが気持ちを発信して、それをお客さんに受信してもらうことだと思ってたんですけど、実はオンステージにいる僕らも受信者だったという。僕らが投げた気持ちを受け取ったお客さんが自分の気持ちに変換して投げ返してくれる、僕たちはそれを受け取っていたということが改めて自覚できたんです。だからそこからは純粋に“ステージに立ちたい”という気持ちで湧いてきて。今年1月からライブは再開しましたけど、お客さんとはステージの上下という関係ではなく、もっと人間臭い1対1としてつながれている気がします」。

——まだ会場はすべてが自由ではないですが、それでもライブが再開したことで気持ち的に楽になりましたか？

「ライブに対する飢えは解消されましたが、それでも全然物足りなくて。お客さんはマスク必携だし、顔は半分隠れているし、フロアからは声が聞こえないし……そこに関してはめちゃくちゃフラストレーションを感じます。ただ、その一方でかつては感じられなかった“何かをどうしても伝えたい”というお客さんの感情が感じられるようになったんです。どうにかして手拍子だけで気持ちを伝えたり、身振り手振りや視線で気持ちを表現しようとしたら、それを感じられるようになったのは、すごい財産だと思います」。

——傍で見ていると、そんな簡単にはへこたれないというか。マイナスをプラスに転換して、もっと盛り上げてやろうというしたたかさやバンドからは感じます。

「それは自分たちのこれまでの歩

みが功を奏して。うまくいかなかった時期が長かったことで僕たちの底力は鍛えられたと思うんです。うまくいかなかった場合はうまくいったときより、もっとうまくいく可能性を秘めていると思って。僕たちはそういう歩み自体もエンターテイメントにするというか、『転んでもタダでは起きない』の精神で進んでいきたいと思えますね」。

最近の楽曲のテーマは人と人とのつながり

——今年2月にはアルバム『アイラヴユー』を発表しました。作品はコロナの影響を受けていますか？

「僕らはあまり時代性に引っ張られた作品を作りたいとは思って。だけど今回の経験をなかったことにするのでもうソコがある。その結果、起こった出来事にフォーカスを当てたわけではないけど、それによって気づけたこと、それがあっても変わらなかったところを描いた内容になりました。間接的に時代の空気は投影されているかもしれません」。

——そして5月にはシングル『愛しい人』をリリース。

「SUPER BEAVERにド直球のラブソングってあまりないんです。“愛”とか“恋”って言葉が出てくるような曲は少なく、でも僕はラブソングが超好きで(笑)。それでラブソングを歌いたいという話は数年前からしてたんです。ただ、この曲は恋愛にフォーカスを当てているけど、それだけで語れない何かのしみ出た曲になりましたね。家族愛だったり、友人関係の愛だったり、大切な人、メンバー、スタッフ……と投影できるのりしろが多い曲に仕上がったのは面白いと思います」。

——7月には続けてシングル『名前を呼ぶよ』をリリースしました。

「バンドも17年目に突入して、自分たちがすごくたくさんの人と共に生きてきた実感があるんです。そんな中で今回は名前というものにフォーカスを当てて。名前って記号的で無機質なもののだけど、これだけ長い間いろんな方と同じ



時間を共有していると、名前はそうした歴史や重みに乗せることができるノートみたいだと思えたんです。シンプルな記号だからこそ、その上に乗せられる余白が大きいという。そういう名前と積み重ねてきた時間、出会いについて歌ったのがこの曲です」。

——アルバム名の『アイラヴユー』、そして愛について歌った2枚の新曲を聞くと、今のSUPER BEAVERがコロナ禍を経て、改めて人と人とのつながりをテーマにしている気がします。

「やっぱりコロナを経験して、人間関係や人に対する想いの質は少し変わった気がするんです。コロナは面白くないことが9割9分だったけど、そうではないほんの1分に気づけたことが今後自分の財産になるとは感じていて。SNSって不安定なつながりだけど、そこに何かしらのリアリティを感じられたのは、人と直接居られるベースがあったからなんですよ。その現実のベースがなくなった瞬間、すごく虚しく感じられて……そういう部分は今後も忘れちゃいけないと思います」。

昨日より今日が楽しくなるように

——以前から不思議に思ってたのですが、SUPER BEAVERというバンドは、とても感

情的で生々しい歌を歌っているのに、どこか自分を俯瞰して見るような冷静さを感じるんです。渋谷さん自身の音楽との向き合い方で何か思い当たる部分はありますか？

「たとえば嘘を歌ってたらどうしても負い目が出るし、そんな状態でステージに立ったらライブが“芝居”になると思うんです。なので、僕はステージ上はもちろん、ステージにいない時間も大事にしたいと思っていて。基本的にオフステージで語る言葉や人に見せる態度を、ステージ上と同じにしたいんです。もしステージで話す言葉が嘘じゃないという堂々とした態度でライブができたら、もっと観る人をエンターテインできるという。だからまずは自分の土台をしっかりと作ることを意識しています」。

——あくまで嘘偽りのない自分でリスナーに向き合いたい？

「普段から観てくださる方ひとりひとりの人生を尊重したいと思っているので、僕自身の視点や感覚も大事にしたいと思うんです。お互い“個”をはっきりした上でぶつかり合うのが理想ですね」。

——2021年も折り返しですけど、今年の後半はライブが中心になるんでしょうか？

「もういろんなものが地続きすぎて前半後半で区切れないのが正直なところ(笑)。でも2021年の前半は立て続けにリリースがあっ

SUPER BEAVER 都会のラクダSP 行脚 ~ラクダフロムライブハウス~

2021.9月22日(水) 周南RISING HALL
2022.1月10日(月・祝)・11日(火) BLUE LIVE 広島

たし、後半はライブの本数が多いので、気張り過ぎずそこに挑みたいですね。僕たちはバンドを長く続けているからこそ、過去一番いい夜を更新し続けたいという気持ちがあって。今後繰り広げられるライブも、過去最高のいい夜を更新していきたい。そこにフラットに、真摯に臨んでいく姿勢はずっと変わらないので、今年後半もその気持ちのまま進んでいくつもりです」。——最後に、SUPER BEAVERとしてのこれからの目標を教えてください。

「少なくとも会場の規模を目標にするのはやめました。『リミットがあるものって達成したらどうなるんだろう?』という。僕はどんな壮大な目標でも今のチームや応援して下さる方のチカラがあれば実現できると思ってるんです。だから今は、抽象的だけど『昨日より今日が楽しくなるようにしよう』くらいしか思っなくて。その結果として長期的に見てバンドが右肩上がりになってほしい。そのためには自分が楽しいと思う感覚を大事にすることが大事だと思うんですね」。